

Title	彙報
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	1949
Jtitle	史学 Vol.24, No.1 (1949. 10) ,p.128- 129
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19491000-0128">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19491000-0128</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

三田史学会に於ては、第一号所報以後、左の通り研究会並びに見学会を催した。

昭和二十二年

十月四日 午後一時、於十番教室 卒業論文披露並送別会

(第三百六十一回例会)

「西洋文明没落」研究(その一) 近代思想に関する一考察

桑原隆次郎君

上代佛教の一考察—その私的信仰の発展形態に就て—

R・プリンクマイヤ君

中古に於ける芸能団体の環境

河津富美子君

形成期都市国家に於ける都市と氏族の関係—のころに就て—

森岡敬一郎君

吐谷渾考

和田博徳君

パキスタン問題—その起源と展望—

小埜学君

幕末より明治初年に至る我国新教の発達

山下淳君

明治維新前後に於ける政治思想

野村康夫君

鳥羽僧正覚猷について

中西文三君

語部に関する研究

小西健介君

嵯峨門派変移上の密教的一禪僧に就て

中村秀男君

十月十六日 午後二時、於九番教室

(第三百六十二回) 例会

高句麗の思ひ出

藤田亮策氏

十月三十日 午後二時、於九番教室

(第三百六十三回例会)

登呂遺跡調査に参加して

清水潤三氏

同

江坂輝彌君

十一月十二日 午後二時、於九番教室

(第三百六十四回例会)

フェビアン社会主義と英国労働党

工藤博君

農神信仰について

伊沢淳君

十二月十日 午後〇時半、於八番教室

(第三百六十五回例会)

海外史壇紹介(プリンストン氏の書簡より)

鈴木泰平氏

明治時代に於ける普選運動とその社会的背景について

門田陽一君

昭和二十三年

二月四日 午後二時、於九番教室

諸侯會議と松平春嶽

河北展生氏

メリー・スチユアートに就て

大場幹雄君

江戸時代のエタに就て

中井和世君

二月十四日 午後一時、於学生喫茶部

卒業論文披露並送別会

英国労働運動と労働党

工藤 博君

祖先信仰への道―氏神神祭について、農神について―

伊 沢 淳君

ルネサンスに於けるフロレンス市の役割 藤井富士也君

メリー・スチュアートに就て 大場 幹 雄君

ヴィクトリヤ女王書簡集について 東 環君

日本新石器時代文化に於ける東南亜細亞の様相

江坂 輝 彌君

律令奴隸の社会的態義に就て 中井 和 世君

### 昭和二十二年秋季 深大寺見學報告

昭和二十二年十月二十五日稍々冷気さへも加へた曇天午前十時京王線調布駅に集合、北方約半里深大寺に向ふ。参加者は伊木先生始め今宮浅子兩教授並学生十数名。深大寺は南多摩郡深大寺村に在り附近一帯は紅葉も終へた森に囲まれ誠に幽靜の境地である。

当寺は寺領五十石の御朱印を賜はり天臺宗東叡山の未浮岳山昌樂院と号す、天平五年の建立にて開山は満功上人と伝へる。古は法相宗なりしが貞觀年中惠亮和尚住職の時改宗したと云ふ。

―新編風土記―

更に同書によれば惠亮和尚は当山の寺務の故に相宗を改めて永く臺教の宗門に帰し是より以来燈々相伝へて繁盛他寺に異つて居つたが源家の祈願所として東国第一の密場であつたと述べ

て居り、且一度ならず二度までも火災に遭ひ世田ヶ谷吉良家が當時の衰廢を歎き再興し当郷を以て供料に充てたと云ふ事である。而して世田ヶ谷吉良家と共に没落し再び危くなつた処を東照宮守護不入の御判物を賜はつて救はれたのであつた。

寺院の附近は人家も少く再三の火災にて昔を偲び得ないのは遺憾であるが現在には本堂に置かれた国宝釈迦牟尼佛拜觀の人がかなり多いと言ふ。

先づ本堂に於て浅子先生より国宝釈迦像に就て御説明があつた。出所は未だ不明であるが東日本には極めて稀な古佛で日本にある釈迦佛にして、腰懸けたものは少く、美術史上貴重な遺品であり、白鳳時代の鑄造と断ぜられて居る。誠に豊潤な美が全体に見られ処々に金箔の名残りを留め顔の表情並に手足の配置共々に飛鳥芸術の流れを汲む技術は巧妙を得て居る。思ひ出でた空穗の歌

鉦鳴らし僧が鎖はず御厨子に

釈迦牟尼僧のおはしたまへる

―空 穗―

佛像拜觀の後伊木先生より当寺所有の古文書に就き御説明があつた。当日実見した主なものは左の通りである。

一、当山縁起写繪入二卷

一、融通念佛記録繪卷物二卷

一、徳川家よりの御朱印入り文書

一同一室に会して食事、帰路鐘を拜見、永和二年丙辰八月十五日の銘あり。